

「トイレ募金」に子供達も参加

この施設にはもう一つ大きな役割があり、トイレが無くて困っている世界中の人たちに、トイレを作る活動の拠点にもなっているのです。例えば、募金ができる「ウンチ形の貯金箱」を配る活動。展示場の中には子供たちの思いとお小遣いが詰まった貯金箱が飾ってありました。展示場の中にも便器の形をした募金箱があり、来場者もその場で募金できるようになっていまし

た。

世界中できちんとしたトイレを使える人は、たったの3分1程度。それ以外の人たちは、不潔でし尿処理の不完全なトイレを使ったり、野原に無造作に排泄をせざるを得ません。そのために、病気が蔓延したり、女性達が性暴力の犠牲になっているのです。だから清潔なトイレを普及させることは、本当に重要なのです。展示を通じて事実を知り、

募金という形で参加できる場があることはとても貴重なのです。



「黄金のうんち」の形をした貯金箱。

まとめ

トイレというと、マイナスイメージがつくことも多いですが、トイレや排泄は、健康な生活やまちづくりには大切な存在です。ちょっと恥ずかしいかもしれないけど、こうした展示をきっかけに、人や地球にとって本当の豊かな生活のあり方を考えてもらいたいと思います。

■水原市トイレ文化展示館「解憂斎」概要

公式HP … <https://www.haewoojae.com>住 所：韓国・水原市長安区長安路458番道9
(梨木洞186-3)

電 話：+82-31-271-9777

アクセス：水原駅からバスで20分

観覧時間：3月～10月 10:00～18:00

11月～2月 10:00～17:00

休 館 日：毎週月曜日（月曜日が祝日の場合にはその翌日）／
1月1日・旧正月および秋夕の連休

入 館 料：無料



トイレ支援を行っている様子を写真で紹介。トイレは現地の人たちにとって未来を感じる大事な存在だ。



トイレ支援のための募金を求める投入口。中にはたくさんのお金が入っていました。

motto!グッドトイレ

～グッドトイレ選奨2015から～

毎年日本トイレ協会主催で、優れたトイレ建築や文化活動に贈られる「グッドトイレ選奨」。選奨に選ばれた作品や活動を通してもっとトイレのことを知ってもらおうコーナーです。

公道を走れるバリアフリートイレ 福祉バイオトイレカー

体が不自由な方や車椅子の方が外出先で困ることの一つがトイレの問題。神奈川県にある警備会社、優成サービス株式会社では、平成20年に、車椅子でも利用できるトイレを車両に搭載した「福祉バイオトイレカー」を開発しました。

東日本大震災や熊本地震の際にはその機動力を生かし、車椅子の方のトイレ支援を行ってきました。現在は4台の福祉バイオトイレカーが、各地のイベントなどでも活躍しています。

なお、このトイレは、排泄物をおが

くずと混ぜて微生物の力で分解処理するため、汲み取りの必要がありません。それでも残ってしまう無機成分はおがくずに吸着され、排泄物はまるで消えたように感じます。使用後のおがくずは理想的な有機肥料となり、契約農家で肥料として使われています。

今年6月には苫小牧市の公用車として採用されることが決まり、今後他の自治体への広がりが期待されています。優成サービスの八木正志社長は、「福祉バイオトイレカーはまだまだ足りない。大手の企業も参入して、もっと普及してほし

い。目標は東京五輪までに100台稼働することです。」と展望を語ってくださいました。

福祉バイオトイレカー
車椅子が乗り降りできるよう電動リフトを完備。サービス介助士の有資格者が同行し、トイレの管理をする。

編集後記

先日子供と一緒に近所の森林公園に遊びに行きました。そこは米軍の家族住宅の敷地内で、一般の日本人は入れなかったのですが、最近になって一般市民にも開放されるようになりました。帰りにトイレに寄ると、個室を仕切るパーテーションの下が30cmくらい開いているのです！隣が見えそうでなんだか落ち着きませんでしたが、「これがうわさに聞いていたアメリカスタイルか！」と妙に納得した出来事でした。

information!

「トイレ診断士達のブログ」と検索してください。
<http://www.toireshindan.com/>

トイレ診断の裏側やちょっと気になるトイレの豆知識まで、トイレ診断士達が日替わりでブログを更新しています。是非ご覧ください！



特集

世界初のトイレテーマパーク

「解憂斎」

みなさん、韓国にトイレのテーマパークがあるのをご存知ですか？以前本紙にも登場いただいたトイレ評論家の白倉正子先生に、トイレテーマパーク「解憂斎」に訪問した様子をレポートしていただきました。

便器型の家「解憂斎（へうじえ）」

皆さんこんにちは。トイレ評論家の白倉正子です。ここは、韓国の水原市。ソウル市から電車で1時間くらいで水原駅に到着します。そこからさらにタクシーで20分ほど行くと、白くて大きな建物が見えてきました。なんとここは洋風便器の形をしている「トイレの家」なのです。元水原市市長の沈載徳氏（在任期間：1995～2002年）の自宅だった建物で、沈氏の没後、トイレ文化を伝える博物館として生まれ変わりました。

建物の中央には、沈氏が実際に使っていたガラス張りのトイレが！そのまわりには、

水原市が牽引してきた韓国のトイレ美化運動の歴史や、世界トイレ協会が行っている発展途上国へのトイレ支援活動などが展示されていました。2階の企画展示コーナーには、韓国の子供たちが描いた「うんちの絵」が貼り出され、トイレを楽しく捉えている様子が分かりました。



沈氏が実際に使っていたトイレ空間。鍵を閉めると透明のガラスが曇りガラスに変化。



2007年に設立された世界トイレ協会の活動が紹介されている。



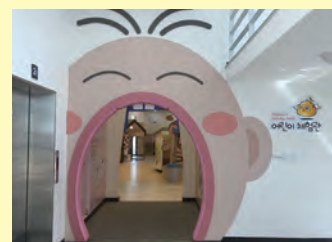
子供達の描いたトイレやウンチをテーマにした絵画の展示。

解憂斎文化センター

隣にあるのが2015年に完成したばかりの「解憂斎文化センター」です。ここには子供たちが遊びながらトイレの文化や大切さを学べる「こども体験館」がありました。口の形の門をくぐると、便器型の滑り台やトイレのゲームやアニメコーナー、トイレの使い方を学べるマナー教育コーナー、トイレに関連する絵本や書籍だけを集めた図書館な

どなど…。排泄は食べると同じように重要であることや、排泄されたものは肥料となり、やがて食べ物になるという自然の循環が体験を通して学べるようになっていて、大人も夢中になってしまいます。建物の周りには便器を植木鉢にした植栽もあり、トイレのイメージを覆す仕掛けがいっぱい。こんな楽しい場所なので、子供たちが遠足で来た

り、水原市観光ツアーに組み込まれていたり、来場者はあとを絶ちません。



「こども体験館」の入口。こどもの口の形をしている。ちなみに反対側（出口）はお尻の形をしている。



トイレ文化公園

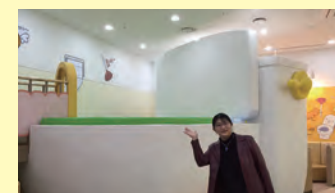
便器の家から外に出ると、そこは「トイレ文化公園」。韓国の昔のトイレ文化や形を伝える模型があったり、実際に見て、触れて、楽しむことができます。



新羅時代の石のトイレ。中央に穴が空いており、水が通る溝がある。



韓国南部の島、済州島の、豚がウンチを食べるトイレ。



大きな便器?実は滑り台。便器内部にある滑り台を、子供たちが夢中になって滑るそうだ。



ウンチにはどんな種類があるかな?形ややわらかさを実際に触って確認できる。

文献に学ぶ「トイレ文化」



このコーナーでは、「トイレ文化」に注目し、トイレに関する興味深い文献をご紹介します。

第22回

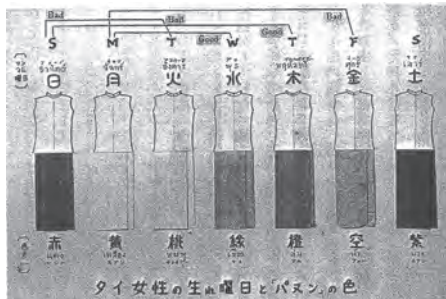
絵解き世界のおもしろトイレ事情

アジア編

タイ

わたしは1968年から翌年にかけて、一年間、外務省からの依頼を受けて、慶応大学からバンコク市内のチュラロンコン大学に、日本の歴史と地理を教えるために出講していた。ある日のこと、教室でタイの女子学生から、「先生のお誕生日は土曜日ですか」と質問されてびっくりしたことがある。「日本人は一般的にそんなことは知らないし、どうして私が土曜日生まれと思うのか」と反問すると「先生はいつも紫色の風呂敷包みを持ち歩いているから……」というのである。わたしは重ねて、紫色と土曜日生まれとどういう関係があるのかと尋ねたら、たいへんに興味深いことが分かった。

タイでは男女結婚の相性というのが、それぞれ生まれ曜日によってその吉凶が定められているのだそう。例えば、日曜日生まれの人とは結婚が許されるが、火曜日生まれの人とは認められない、というわけである。従って、男性は恋をする前に、あらかじめ相手の女性の生まれ曜日を知っておかないと不幸な目に遭うことも生じる。タイでは未婚の女性には生まれ曜日によってスカート(パヌンという)の色に次のような取決めがあるというのだ。



タイ女性の生まれ曜日とパヌンの色

日曜日生まれ……赤色
月曜日生まれ……黄色
火曜日生まれ……ピンク色
水曜日生まれ……緑色
木曜日生まれ……オレンジ色
金曜日生まれ……空色
土曜日生まれ……紫色

そんなわけで、いつでも紫色の風呂敷をわたしが教室に持ち込むので、土曜日生まれかと聞かれたわけだ。なお、結婚してしまえば、どんな色を使ってもいいそうである。

わたしが講義していたチュラロンコン大学は、タイでも一番権威のある国立大学で、チュラロンコン大王という王様の意志によって創設されたそうである。この王様はタイの近代化に努力されたことによって、国民からたいへん尊敬されているのであるが、この王様が実は火曜日生まれなのだ。したがって、この大学のスクールカラーはピンク色。大学の売店で売っているノート、表紙からキーホルダーまでピンク。さらに名刺を頼むとピンク、トイレへ入ればロールペーパーもピンク。バンコクの駅頭で売っているトイレトペーパーも、ピンクが目立っていた。

初めは、なんでピンクばかりなのか分からなかったが、この色にはそういう故事来歴があったのだ。だから日本の外務省や通産省あたりが、トイレトペーパーは白色度60パーセント以上などと、白い色にこだわっていたら外国には通用しない。華僑あたりはめざとくこうした事情に合わせて、タイ国にはピンク色のトイレトペーパーを輸出しているのだ。

バンボン事件

もう一つ、戦争中のタイでのエピソードを紹介しよう。わたしは当時、専門の考古学を航空学と徴兵官に聞き間違われて、陸軍航空隊の飛んだ中隊長であった。ある日、サイゴン(現在はホーチミン市)からバンコクへ飛んだ。その夜、ホテルで夕食を済ませて外出しようと思ったら突然、日本軍将兵に外出禁止のおフレが出た。後になって分かった事だが、その理由はバンコクの南にあるバンボンという所で思わぬ事件が起こったからである。その頃、日本軍の一部が、バンボンという町に進駐していた。銃を持って立っている日本軍の兵隊の前を、住民達は敬意を表わしておじぎをして通過していった。その中に、黄色の衣をまとった可愛らしい少年僧がいて、ニコニコしながらおじぎをした。あまり可愛いので、兵隊の一人が、銃を支えていない左手でその少年僧の頭を三べんなでしまった。ところがニコニコしていた少年僧は、いきなりワーツと泣き出し、住民に訴えに行き、大変な騒ぎになってしまった。何が何だかわけの分からないその兵隊は、群がって押し寄せてくる住民に驚いて、威嚇射撃をして本隊に知らせるや、発砲にますます怒った住民は、タイの軍隊に知らせるわで、まさに一触即発の事態になってしまったのである。



これは、タイでは、お坊さんの体には絶対に触れてはならない、というタブーがある上に、ましてお坊さんの頭に触れると、いくら修行しても解脱できないという、きびしい戒律があるかららしい。しかもタイでは、インド同様に左手は不浄の手である。触ってはいけないお坊さんに、よりによって不浄の左手でその頭を三べんなでしまったのだから、彼らにしてみれば大問題になるわけだ。日本の兵隊はそんなことは全く知らなかったわけで、「日本人は右手と左手に、浄・不浄の区別はなく、また、可愛いと思ったら児童の頭をなでるクセがある。決して侮辱したのではない」と日本軍の幹部がタイ軍の幹部に了解を求めて、どうにか事なきを得たのである。

その翌日から、日本軍司令部はあわてて「タイのお坊さんには絶対触ってはならない」というおふれを出したが、ちょっと遅かった。外国で作戦行動をする場合には事前に、戦闘だけでなく、その国の民俗習慣についても充分知っておかなければいけない。経済面で国外へどんどん進出している現在でも、相手国をよく知っておく必要があるのは論を待つまでもあるまい。

タイの大学においても、国王から卒業証書を頂く際に、国王のほうは両手で証書を差し出されるが、学生の方は不浄の左手は後ろに回して、右手だけで受け取るのが礼儀になっている。

なお、タイの大学やホテルなどのトイレにはロールペーパーが備えられているが、普通の民家では、竹の繊維で作ったという黄色っぽい紙が釘にぶら下げられている場合もあるし、田舎に行くと、大きなカメに水が入っているだけで、紙や手拭い、タオルの類など全くない場合もある。第一われわれは使用した紙を捨てるに捨てられず困る場合さえあった。

水上家屋のトイレ

タイ国内で貴長の川を、日本では一般に「メナム川」というが、タイ人たちにとって「メナム」は単に川という意味で、固有名詞ではない。われわれのいうメナム川を、彼らは「メナム・チャオプラーヤ」と呼んでいる。チャオプラーヤというのは、昔なら公爵とでもいうか、タイ国最高位の身分を指す。

この川は雨期と乾期とで水位が著しく増減するために、沿岸に固定した杭上家屋を建てるよりも、自由に上下に浮動できる水上家屋にしたほうが便利が多い。二隻の船を並べて、その上に小屋を載せたような例もあるが、多くは丸竹をならべた筏の上に家屋をしつらえたものである。筏も一重ではなく、互い違いに三重に組んだものもある。

こうした水上家屋が、川岸の樹木や杭にロープで流されないように繋留されている。暑いところなので、日中は



人間が排出した物をも魚が食べ、再び、その魚をも人間が食べる。その繰り返し……



タイでトイレ協会設立

1998年2月末日、タイ国バンコク市幹部のクセムサン・スワナラット氏が東京西新橋の交流サロン「集&YOU」で開かれた日本トイレ協会の会合に出席し、タイ国内にもトイレ協会を設立する意向を明らかにした。日本トイレ協会の事務局長に、設立総会にはゲストとして参加するよう要請した。

また、1999年あたりにはトイレ・シンポジウムがバンコク市内で開催されるかも知れない。なお、アジア地域では上海市もトイレシンポジウム開催の意向を持っているという。さらに日本トイレ協会は、新しいアジアへ向けてトイレネットワーク構想について意見を交換し、トイレ先進国としての日本の面目躍如であった。

【出典】 絵解き世界のおもしろトイレ事情
(51頁から58頁より転載)
発行所：日地出版
著 者：西岡秀雄
発 行：平成10年10月